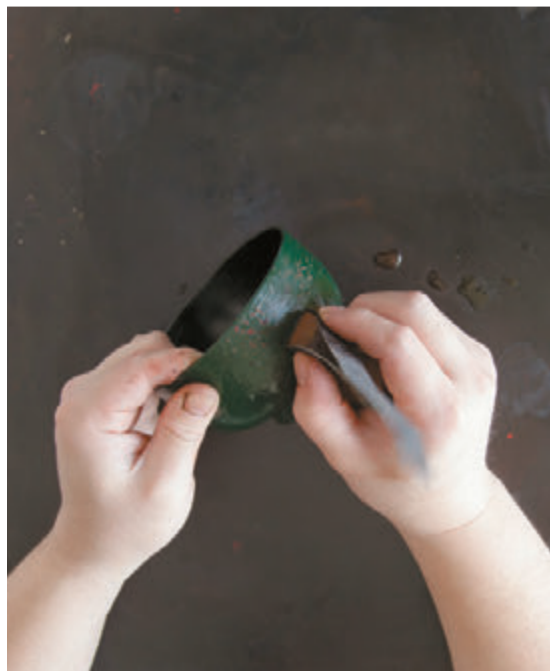


多彩な色、表現の幅が津軽塗の魅力 伝統の技法守り現代へ発信

對馬眞 青森／
デザイナー・津軽塗プロデューサー

子どもの頃から「本物」を身近に



お椀の木地に漆を塗り重ねた後、研ぎ出して模様を出す作業



津軽塗で使う漆や顔料などの材料

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッショングャーナリスト)・アート・プロデューサー・下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発注。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。



プレゼンテーションする對馬さん

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARTAクリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(ANREALAGE代表取締役社長・デザイナー)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)、プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。青森県選出の匠、デザイナー・津軽塗プロデューサーの對馬眞さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



1月24日、プレゼンテーションにて

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

広告



スーパーバイザー
小山 薫堂 氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

組み合わせは自在 好みのデザインで

青森県弘前市に生まれ育った對馬さんにとって、故郷の伝統工芸の津軽塗はいつも身近にある物だった。ただ、売り場に置かれていた商品については「昔からあまり変わっていない。現代のニーズに合わせた物がもっとあればいいのに」と物足りなさを感じていた。

数年前に地元の職人と知り合う機会があり、自分のコレクションとして津軽塗で作ってほしいと、オイルライターや置物を注文したのが職人とつながるきっかけとなった。部分的に色を変え、お好みでフルオーダーできることが面白く、他の人にも体験してもらいたいと思った。



エリア・コンサルティングの様子

ただ、一般の人がオリジナルの津軽塗を欲しいと思っても、色の組み合わせなどを細かく職人に伝えるのは難しい。そこで、デザイナーの仕事をしてきた對馬さんは、あらかじめ設定した多彩なパターンの中から選びやすいようにと、津軽塗のセミオーダーブランド「シカケ」をプロデュース。2017年にウェブサイトを開設、受注を始めた。300年以上の歴史を誇る津軽塗は「唐塗」(七々子塗)など代

表的な四つの技法で作られ、それぞれ独特の模様がある。漆に顔料を入れて作り出す色のパリエーションも豊富だ。江戸時代に地元の津軽藩では、藩主ら身分の高い人が「手板」という塗り見本を基に、お抱えの職人に指示し作らせていたとされる。



シカケのお椀(上)と塗りの見本

シカケの商品もそれに倣って、13種類の塗りの見本を見ながら、お椀であれば「上をピンクの唐塗下を紋紗塗」というように自由に組み合わせられる。

注文を受けた後、對馬さんと一緒に活動する職人が2カ月ほどかけて制作する。デザインは現代的でも、長く受け継がれてきた技法に忠実に作ることを大切にしている。お椀の木地は天然の漆を下地から使う。下地の次に、模様を付けるための「仕掛け」という作業を施し、何層にも漆を塗り重ねてから研ぎ出すと、隠れていた模様が現れる。

「伝統の津軽塗の美しさとともに、色や質感を自在に表現できる魅力を伝えたい」と活動を続ける對馬さん。一方、時代の流れの中で地元での売れ行きは落ち込み、職人も減ってきたことに危機感を抱いていた。「行き詰まりを打開し全国的に津軽塗を浸透させることを目指し、本プロジェクトに参加した。



シカケの津軽塗の商品をパソコンでデザインする對馬さん

プロジェクトで對馬さんが意識したのは、高級なイメージを持たれがちな津軽塗を、現代人に身近に感じてもらうような物にしたいということだった。キックオフセッションでは、小山氏から「子どものお食い初めで使う食器など、ギフト用や特別な日向けのほうがプレミアム感が出る」とアドバイスを受けた。これを踏まえつつ、「お食い初めのように一回きりでなく、小さい頃から本物の津軽塗として使い続けてもらえる物を作りたい」と方向性を模索した。

昨年9月に弘前市で行われたエリア・コンサルティングでは、子ども用のお椀とスプーン、箸のセットを提案。サポートメンバーの川又俊明氏から「子どもが好きなパステルカラーにし、同じ色でも複数の塗りでパリエーションを見せればどうか」と助言され、デザインする作業に入った。

当初、お椀を赤系など同系の2色で組み合わせることも試みた。だが、「子どもだからかわいいうしろ色というだけでなく、確かな物に触れてほしい」という意味で落ち着いた雰囲気を出したい

と思い直し、2カ月ほど悩んだ。

試行錯誤の末、お椀の半分をピンクかブルーの色漆で塗り、残り半分は黒い漆を木目が見えるよう木地に擦り込む「拭き漆」という技法により、職人に制作させた。やさしいパステルカラーで高級感も兼ね備えた仕上がりにし、スプーンと箸も同じ塗りでそろえた。

2色それぞれ唐塗タイプと七々子塗タイプを設定し、計4パターンから選べるようにした。津軽塗の技法の中でも特に華や



完成プロダクト「津軽塗の子ども椀セット」



對馬 眞
青森/デザイナー・津軽塗プロデューサー

1978年青森県弘前市出身。2003年岩手大学大学院修了。青森県立美術館エディキーター、デザイン企画会社などを経て、2016年より津軽塗セミオーダー シカケを立ち上げる。2012年、東京で開催された第67回国際通貨基金(IMF)・世界銀行年次総会の公式記念品「3つのおきあがり小法師」のデザインを担当。

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT